Tsukuba Psychological Research
1998, **20**, 157-162

正当世界信念が社会状況の不公正判断に及ぼす影響について[1)]

筑波大学心理学系　今野　裕之・堀　　洋道

Effects of justice beliefs on injustice judgement

Hiroyuki Konno and Hiromichi Hori *(Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan)*

This study investigated the role of just world beliefs on injustice judgements.In preliminary examination, unjust situations were accumulated and classified. In the main examination, the questionnaire consisted of (1)Just World Scale(JWS), and (2)perceived pervation of injustice, (3)negative attitudes toward unjust situation, (4)sense of resignation to unjust situation.The questionnaire was completed by 129 undergraduate students. The main results are as follows: (1)Score of JWS was negatively related with perceived pervation of injustice. (2) There is no significant correlation between JWS and negative attitudes toward unjust situation. However, negative attitudes positively related with sub-scales of JWS. (3)JWS was negatively related with sense of resignation to unjust situation. Significant correlations between JWS and emotional reactions were obtained. Theoretical implications of these findings were discussed.

Key words: social justice,world view,belief in a just world,undergraduates,unjust situation.

人は一般に，努力や能力・善行といった正の投入に対しては報酬や社会的成功といった正の結果が伴い，怠慢や劣等・犯罪といった負の投入に対しては失敗や刑罰といった負の結果が伴うと考える傾向がある(Heider, 1958)．Lernerとその共同研究者たちは，このような認知傾向が帰属のバイアス源として働くと考え，一連の実験研究を行った(Lerner, 1965; Lerner & Simmons, 1966, etc.)．Lernerらの実験は，不当な境遇にある人物—たとえば電気ショックを伴う学習実験に無報酬で参加している人物—は，不当でない境遇にある人物—同じ実験に報酬を得て参加している人物—よりも低く評価される傾向があることを示したものであり，この結果は先に述べた認知傾向に起因すると解釈された．この認知傾向は後に正当世界信念(belief in a just world)と名づけられた(Lerner, 1980)．ここでいう正当な世界とは，正の投入には正の結果，負の投入には負の結果が伴うような世界であり，「人々が受けるに値するものを受けている世界(Lerner & Miller, 1978)」である．

近年では，研究の焦点は正当世界信念の個人差へと移行しており，Rubin & Peplau(1975)の開発した正当世界尺度(Just World Scale; JWS)を用いて，多くの研究者が正当世界信念と他の個人差変数の関連を検討する研究を行っている．その結果，正当世界信念との関連が示された変数には，権威主義(Rubin & Peplau, 1975)，社会的弱者への否定的態度(Furnham & Gunter, 1984; MacLean & Chown, 1988)，内的統制(Zuckerman & Gerbasi, 1977)，単純課題における生産性(Tomaka & Blascovich, 1994)などがある．正当世界信念は，これらの変数といずれも正の関連を持っていた．これは，「正の結果を得ている者は優れた人物である(権威主義)」「負の結果を得ている者は劣った人物である(弱者への否

1）本論文は稲泉秀和氏による筑波大学人間学類平成7年度卒業論文のデータにもとづき，再分析を行い新たに整理したものである．

定的評価)」「物事の原因は自分自身にある(内的統制)」「努力はいずれ何らかのかたちで報われる(生産性)」といったように，正当世界信念の強い人物は自らの信念に一致するように因果関係を認知する傾向があることを示している．言い換えれば，正当世界信念には「正の投入(負の投入)」から「正の結果(負の結果)」を予測させ，「正の結果(負の結果)」を「正の投入(負の投入)」に帰属させる認知的な働きがあるといえる．

ところで，日常生活においては，上記のように投入だけ，もしくは結果だけを目にする機会ばかりではない．「努力したら成功した」「悪いことをしたのに罰されなかった」といったように，投入と結果を同時に認知する場合も多い．とりわけ，投入と結果のバランスがとれていない場合，人は「不公正である」と感じ，様々な認知・感情反応や行動が生起する(Adams, 1965; Walster, Walster & Bersheid, 1978)．

それでは，正当世界信念と不公正状況への認知・感情反応とはいかなる関連があるのだろうか．おそらく，正当世界信念の強い者にとって，不公正状況の存在は自らの信念を維持する上での脅威となる．そのため，正当世界信念の強い者ほど，不公正状況に対して否定的な態度を示すと考えられる．ただしその際，不公正状況を否定するには大きく2種類の方法がある．第1に，不公正状況の存在そのものを否定すること．第2に，仮に不公正状況が存在するならば，それに対してネガティブな評価をすることである．さらに，正当世界信念が強いほど，不公正に対して許容・妥協しない傾向があると考えられる．以上から，正当世界信念と不公正状況への態度に関して次のような予測を設定しうるであろう．(i)正当世界信念と不公正状況の広がりの認知の間には負の相関がある．(ii)正当世界信念と不公正状況への否定的評価(不公正感・腹立ち感情・悲しみ感情)の間には正の相関がある．(iii)正当世界信念と不公正状況の許容(あきらめ感)とは負の相関がある．

本研究では，質問紙調査を通して上記の予測を検証することを目的とする．

方　法

調査対象

茨城県内の4年制大学生および埼玉県内の看護系専門学校生138名(男性42名，女性96名)であった．

調査期日

1995年9月であった．

質問紙の構成

以下の項目より構成されていた．

正当世界尺度　従来の研究の多くでは，Rubin & Peplau(1975)による20項目からなる尺度が用いられていた．しかしながら，この尺度に関しては因子構造が安定しないという問題点があり(Whatley, 1993; Caputi, 1994)，また文章表現に理解しにくいものも多い．そこで今回は新たに4項目からなる尺度を作成した．項目の作成にあたっては，正当世界の要件である「正の投入に対して正の結果が伴う」「負の投入に対して負の結果が伴う」ことを記述する項目をそれぞれ1項目ずつ作成し，更にそれぞれの逆転項目を作成し合計で4項目とした．回答形式は5件法であった．なお，調査に当たっては，本尺度の妥当性を確認する意味でRubin & Peplau版も同時に実施した(20項目，5件法)．

不公正状況　不公正状況については，以下のような手順で設問を作成した．はじめに，大学生70名を対象に「日常生活で不公正と感じる場面」に関して自由記述調査を行った．その結果収集された状況を整理し，8種類の不公正状況の記述を作成した．しかし，これらの不公正状況は大学生が日常的に感じる不公正に偏っていたため，より一般的な不公正状況(例：給与制度や犯罪に関するもの)の記述を4種類付け加え，計12の記述を用いることとした．

設問は，上記12の不公正状況各々を，以下の観点から評定させるものであった．(1)広がり認知：「どの程度よくある出来事か」の1項目．(2)否定的評価：「どの程度不公正と感じるか」「どの程度腹立ちを感じるか」「どの程度悲しみを感じるか」の3項目．(3)許容傾向：「どの程度あきらめを感じるか」の1項目．回答形式はいずれも5件法であった．

結　果

正当世界尺度について

正当世界尺度の信頼性を検討するため，尺度の4項目に対して主成分分析を行った．結果をTable 1に示す．すべての項目が第1主成分に高い負荷を示していることから，本尺度が1次元的な構造を持つことが示された．また，内的一貫性の指標としてα係数を算出したところ$\alpha=.61$であった．この値は一般的な基準からいえば十分なものではないが，4項目という項目数から考えて実用には耐えうるものと考えられる．そこで，4項目の合計得点を算出し正当世界得点とした．また，同時に実施したRubin & Peplau版の正当世界尺度との相関係数は$r=.45$,

(p<.001)であり，本尺度と従来の尺度の間に高い相関が認められた．

ところで，Rubin & Peplau 版の正当世界尺度に関する因子分析研究では，正当世界尺度は多次元的構造を持つことが示されている(Furnham & Procter, 1989; Whatley, 1993; Caputi, 1994)．そこで，この4項目に対して因子分析を行った(Table 1)．主因子法主成分解で固有値1以上の2因子を抽出しVarimax 回転を施した．第1因子には逆転項目が高い負荷を示し，これらの項目がいずれも不公正な事態の多さを示していることから，この因子を「不公正な現状」と命名した．また，第2因子には正項目が高い負荷を示しており，これらの項目が投入には相応の結果が伴うという因果規則を示していることから，「因果応報」因子と命名した．Furnham & Procter(1989)は，正当世界尺度を正項目と逆転項目に分けて考えるべきであるとを主張しているが，今回の因子分析の結果はこの主張に一致するものといえる．そこで以後の分析においては，正当世界尺度の合計得点とともに，各因子を代表する得点として，各因子に負荷の高い項目の合計得点を用いることとした．

不公正状況について

12の不公正状況について，本研究の質問紙では，12の不公正状況各々に対して3種類の観点(5項目)から評価を求めた．この評価値をもとに不公正状況に対して因子分析を行った．その際，観点の要因をつぶし，138名×5項目ののべ690名として分析を行った．主因子法主成分解の因子分析を行ったところ，固有値1以上の因子数は3であったが，回転後の解釈の明瞭性を考慮し，2因子を抽出した後Varimax 回転を行った．結果を Table 2 に示した．第1因子に負荷の高い項目は，「生まれつきの才能や容貌に大きな差」「出席せずに良い成績」「交通違反してもつかまらない」等，他者が過大な利益を得ている場合であり「他者の不当な利益」因子と命名した．第2因子には，「していないことで怒られたり非難された」「仕事を押しつけられた」等，自

Table 1　正当世界尺度の主成分分析および因子分析の結果

項　目	主成分分析	因子分析		
	第1主成分	Ⅰ	Ⅱ	共通性
1．この世の中では，努力はいつか報われるようになっている．	-.62	-.00	.88	.78
2．この世の中では，努力や実力が報われない人が数多くいる．	.63	.88	-.01	.78
3．この世の中では，悪いことをした者は必ずその報いをうける．	-.73	-.17	.87	.78
4．この世の中では，悪いことや間違ったことをしても見逃される人が数多くいる．	.73	.87	-.16	.79
寄　与	1.86	1.57	1.56	3.13

Table 2　不公正状況の因子分析の結果

項　目	第1因子	第2因子	共通性
9．生まれつきの才能や容貌に大きな差がある	.80	-.09	.65
4．自分よりも遙かに才能のある人を見た	.76	-.05	.59
8．同じ科目なのにくらすによって授業内容に差があった	.65	.26	.49
12．交通違反者のうち多くの人は捕まらないで済む	.65	.17	.45
3．出席も努力もせずに容量だけで良い成績を取る人を見た	.62	.50	.63
7．ゴミを出すときの規則を守らない人を見た	.59	.33	.45
2．他の人が楽にこなしている課題が自分には難しかった	.35	.29	.21
6．自分がしていないことで怒られたり非難されたりした	-.11	.85	.73
5．皆でやるはずの仕事を自分に押しつけられた	.20	.77	.64
1．自分では自信のあったレポートが低く評価された	.04	.65	.42
10．給与や出世の程度が、能力や努力に対応していない	.44	.61	.56
11．犯罪事件で被害者の苦しみに比べて加害者の苦しみが軽い	.32	.60	.46
寄　与	3.27	3.02	6.29

分が損失を被っている場合であり，「自分の不当な損失」因子と命名した．そこで，各因子に高い負荷を示した項目をそれぞれの因子を代表するものとし，広がり，否定的評価，許容傾向の各項目ごとに合計得点を算出した．

正当世界信念と不公正状況の広がり認知の関連

正当世界尺度の合計得点及び各因子の得点と，不公正状況の広がり認知の各因子の得点の間で相関係数を算出した．結果をTable 3に示した．まず正当世界尺度合計得点との関連であるが，「他者の不当な利益」(r=-.20, p<.05)，「自分の不当な損失」(r=-.33, p<.001)のいずれとも負の相関が見いだされた．ただし因子ごとに見ると，不公正の広がりの2因子は「不公正な現状」因子との間には高い正の相関があるものの，「因果応報」因子とは無相関であった．以上から，正当世界信念が強いほど不公正が広がっていないと感じやすいという当初の予想は支持されたといえるが，その関連は主に「不公正な現状」に示される信念の働きによるものといえるだろう．

正当世界信念と不公正状況の否定的評価の関連

正当世界尺度の合計得点及び各因子の得点と，不公正状況の否定的評価の各因子の得点の間で相関係数を算出した．結果をTable 4に示した．不公正感に関して，正当世界尺度合計得点の関連を見ると，どちらの因子とも無相関であった．しかし因子ごとに見ると，「不公正な現状」因子は「自己の不当な損失」と(r=.22, p<.01)，「因果応報」因子は「他者の不当な利益」(r=.28, p<.001)，「自己の不当な損失」(r=.28, p<.001)の両者との間に相関が認められた．腹立ち感情に関しては，正当世界尺度全体とは無相関であったものの，因子ごとに見ると「不公正な現状」因子は「自己の不当な損失」因子と正の相関(r=.19, p<.05)，「因果応報」因子は，2因子(他者利益とr=.30, p<.001；自己損失とr=.35, p<.001)と正の相関が認められた．悲しみ感情については，正当世界尺度全体とは無相関であり，下位因子で見ると「因果応報」因子が「自己の不当な損失」因子(r=.18, p<.05)と正の相関をしていた．総じて言えば，正当世界信念が強いほど不公正状況に対する否定的評価が強いという当初の予想は，明瞭には支持されなかった．しかし，因子別に見ると「因果応報」因子が不公正状況の否定的評価と強い正の関連を示した．同時に，「不公正な現状」因子も弱い正の相関を示し，このことが全体として正当世界信念と不公正状況の否定的評価の関連を不明瞭なものとしていたと考えられる．

正当世界信念と不公正状況の許容傾向の関連

正当世界尺度の合計得点及び各因子の得点と，不公正状況への許容傾向各因子の得点の間で相関係数を算出した．結果をTable 5に示した．正当世界尺度合計得点との関連では，2つの因子がいずれも負

Table 3　正当世界信念と不公正の広がりの関連

	正当世界信念	因果応報因子	不公正な現状因子
[不公正の広がり認知]			
他者の不当な利益	-.20*	.00	.34***
自己の不当な損失	-.33***	-.10	.42***

n=138．表中の数値は相関係数．***：p<.001　*p<.05

Table 4　正当世界信念と不公正状況の否定的評価の関連

	正当世界信念	因果応報因子	不公正な現状因子
[不公正感]			
他者の不当な利益	.11	.28***	.14
自己の不当な損失	.06	.28***	.22**
[腹立ち感]			
他者の不当な利益	.13	.30***	.13
自己の不当な損失	.13	.35***	.19*
[悲しみ感]			
他者の不当な利益	-.02	.09	.13
自己の不当な損失	.03	.18*	.16+

n=138．表中の数値は相関係数．***：p<.001　**：p<.01　*p<.05　+：p<.10

Table 5　正当世界信念と不公正状況の許容傾向との関連

	正当世界信念	因果応報因子	不公正な現状因子
[あきらめ感]			
他者の不当な利益	-.20**	-.07	.25**
自己の不当な損失	-.24**	-.13	.26**

n＝138．表中の数値は相関係数．　**:p＜.01

の相関(他者利益と r=-.20, p<.05；自己損失と r=-.24, p<.01)をしていた．因子ごとに見ると，「不公正な現状」因子は「他者の不当な利益」(r=.25, p<.01)，「自己の不当な損失」(r=.26, p<.01)の両者との間に正の相関が認められた．一方，「因果応報」因子に関しては相関は見いだされなかった．以上から，正当世界信念が強いほど不公正を許容しないという当初の予想は支持されたといえるが，その関連は主に「不公正な現状」に示される信念の働きによるものといえるだろう．

考　察

本研究の目的は以下の予測を検証することであった．(i)正当世界信念と不公正状況の広がりの認知の間には負の相関がある．(ii)正当世界信念と不公正状況への否定的評価(不公正感・腹立ち感情・悲しみ感情)の間には正の相関がある．(iii)正当世界信念と不公正状況の許容(あきらめ感)とは負の相関がある．

質問紙調査によって収集されたデータを分析した結果は次のように要約できる．(1)正当世界信念と不公正状況の広がりの間には負の相関が認められた．これを正当世界信念の下位因子ごとに見ると，「不公正な現状」因子との間にのみ強い関連があった．(2)正当世界信念と不公正状況への否定的評価の間には明瞭な関連は見いだされなかった．ただし，下位因子ごとに見ると，「因果応報」因子が否定的評価と強い正の相関をしていた．また，弱い相関ながら，「不公正な現状」因子と否定的評価との間にも正の関連が認められた．(3)正当世界信念と不公正状況の許容傾向の間には負の相関が認められた．これを正当世界信念の下位因子ごとに見ると，「不公正な現状」因子との間にのみ関連があった．

以上から，当初の予測のうち，(i)および(iii)は支持されたものの，(ii)は支持されなかったといえる．正当世界尺度が不公正状況への否定的評価との間に関連が見いだされなかったのは，統計的には，正項目である因果応報因子と逆転項目である不公正な現状因子がともに否定的評価と正の相関をしていたためである．それでは，逆の意味合いを持つと考えられる2つの因子がいずれも否定的評価と正の相関をするのはいかなる理由によるのだろうか．因果応報因子は，正の投入は正の結果をもたらし，負の投入は負の結果をもたらすという公正な因果原則を信じる程度を表す．したがって，因果応報因子と否定的評価が正の相関をするのは，因果応報原則を信じる人物ほど不公正状況の存在によって自らの信念を脅かされるため，そのような状況を否定しようと動機づけられるためと考えられる．一方，不公正な現状因子は因果原則から外れた不公正な出来事の多さをどれだけ意識しているかということを示す．この因子は，不公正に対する鋭敏性を表しており、それがゆえにこの因子の得点の高い人ほど不公正な出来事に対して否定的な態度を持つのかもしれない．しかしながら，各因子の特徴を明らかにするためには，今回の研究のデータだけでは不十分である．今後，さらなる研究が必要となろう．

また、本研究では、Rubin & Peplau(1975)による従来の正当世界尺度にかわり、新たに4項目からなる正当世界尺度を作成し、用いた。信頼性に関する分析を行った結果、この尺度が1次元的な尺度としては十分な信頼性を持っていることが確かめられた。妥当性に関しては、今回はRubin & Peplau版との関連をみるにとどまったが、その相関は高いものであった。しかし、今回の研究ではサンプルは限定されている点、また妥当性の検討が不十分な点など、いくつかの問題点がある。本尺度の信頼性・妥当性に関しては今後さらに検討する必要があると考えられる。

引　用　文　献

Adams,J.S. 1965 Inequity in social exchange. In L. Berkowitz(Ed.), *Advances in experimental social psychology* Vol.2. Academic Press:New York. Pp. 267-299.

Caputi,P. 1994 Factor structure of the just world scale among Australian undergraduates. *The Journal of Social Psychology*, **134**, 475-482.

Furnham, A., & Gunter, B. 1984 Just world beliefs and attitudes towards the poor. *British Journal of Social Psychology*, **15**, 363-366.

Furnham, A., & Procter, E. 1992 Sphere-specific just world beliefs and attitudes to AIDS. *Human Relations*, **45**, 265-280.

Heider, F. 1958 *The psychology of interpersonal relations*. Wiley: New York.

Lerner, M. 1965 Evaluation of performance as a function of performer's reward and attractiveness. *Journal of Personality and Social Psychology*. **1**,355-360.

Lerner, M.J., 1980 *Belief in a just world*. Plenum: New York.

Lerner, M.J., & Miller, D. 1978 Just world research and the attribution process: Looking back and ahead. *Psychological Bulletin*, **85**, 1030-1051.

Lerner, M.J., & Simmons, C. H. 1966 The observer's reaction to the "innocent victim": Comparison or rejection? *Journal of Personality and Social Psychology*. **4**. 203-210.

MacLean,M.J., & Chown,S.M. 1988 Just world beliefs and attitudes toward helping elderly people: A comparison of British and Canadian university students. *International Journal of Aging & Human development*. **26**, 249-260.

Rubin, Z., & Peplau,A. 1975 Who believes in a just world? *Journal of Social Issues*, **31**, 65-89.

Tomaka, J., & Blascovich, J 1994 Effects of justice beliefs on cognitive appraisal of and subjective, Physiological, and behavioral responses to potential stress. *Journal of Personality and Social Psychology*, **67**, 732-740.

Walster,E., Walster,G.W., & Bersheid,E. 1978 *Equity: Theory and research*. Allyn & Bacon; Boston.

Whatley, M. A. 1995 Belief in a just world scale: Unidimentional or multidimentional? *Journal of Social Psychology*, **133**, 547-551.

Zuckerman, M., & Gerbasi, K. 1977 Belief in internal control or belief in a just world:Use and misuse of I-E Scale in prediction of attitudes and behavior. *Journal of Personality*, **45**, 356-378.

—1997. 9. 30 受稿—